

6. 間久里のうなぎはうまかった

宮川 進

江戸時代、日光街道の間久里は、美味しいうなぎが有名でした。

☆当時の「間久里」は日光街道にうなぎを売る茶店が三、四軒あって、その前に古い川が流れ、白鷺などが浅瀬で魚を獲ろうとしている様子は、老中・松平定信がほめるほど、趣きがあったようです。

☆間久里には川なんてないけど昔、元荒川は、いまのべ切橋の辺りで東北へ流れを変え、上間久里の方へ流れて日光街道を越えた付近で今度は360度向きを変えて南へ流れ、今の梅林公園の近くで今の流れへ戻るといふ大曲流をしていたのです。それが江戸時代の初めに洪水対策として流れを変える工事が行われ、べ切橋のところで川をまっすぐつないでしまいました。川のあとは小さな流れ、沼、池となって残り、それを街道筋の茶店は、うなぎを入れる生け簀として使ったのではないかと思われまます。

☆どんなヒトたちに好まれたか 松平定信は道中記に残し、秋田のお殿様は参勤交代の度にお寄りになって賞味し、「秋田蘆（しゅうでんろ）」と名付けた専用の別室まで造っておられました。

◎福居芳磨という国学者は「このうなぎの味わいは大変よくて、「江戸前」というのは、この辺でとれたものか」と旅日記に書いています。

◎「国宝・鷹見泉石像」を描いた三河藩の家老・蘭学者・儒学者の渡辺崋山は評判のうなぎ屋でお茶もうまく、奥座敷も素晴らしかったと書き、松前へ行く江戸町人の央斎は「名物のうなぎはうまくー」と残しています。ただ、著者不明の「東案内記」という享和2年の記録には「ちよつと高値であった」と書かれています。昔からうなぎは高価！

◎そのほか、間久里のうなぎの登場は数多く、弥次さん、喜多（北）さんで有名な十返舎一九の奥羽道中膝栗毛にも登場しています。